

展望

## シュールレアリスムの萌芽

小島 なお

戦間期のフランスで興った文学・芸術運動であるシュールレアリスム。日本においては一九三〇年代以降に前衛芸術として発展し、短歌においても非現実感や奇抜さ、幻想性が見いだされる作品に対しての批評語としても用いられるようになっていった。

当然、言葉として認識されるずっと以前から、詩歌創作の現場においてシュールレアリスムを志向する心の働きは存在した。短歌史においてこうした心の働きを早い段階で様式化し、実践したのが藤原定家だろう。崇高・寂寥への志向性が繊細、優美な気分としてあらわれている詠風を幽玄体と呼び十体の一つに据えた。

春の夜の夢の浮き橋とだえて峰にわかれる横雲の空

藤原定家『新古今和歌集』

朝を迎えて春の夜の夢が途絶えた。見ると峰から横にたなびいた雲が離れてゆく。分かれてゆく雲は夢の幕切れであり、不確かな夢の逢瀬を永遠に閉ざす。夢、橋、雲と、細く柔らかな糸が複雑に絡みあい言い尽くせない

余情を湛えている。定家の代表歌であり、幽玄体のひとつの達成と見做されている。

風吹けば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か 壬生忠岑『古今和歌集』

定家の歌は忠岑の歌の本歌取りである。本歌では去っていった恋人の喩として雲が擬人

化されているゆえに、定家の「浮き橋」はほのかな恋の場面を誘うのである。忠岑の歌論書『忠岑十体』の解説に、定家に先がけて幽玄の語が見られるのも興味深い。「詞は凡そ流たりと雖も、義は幽玄に入る」と説明される十体の一つ、高情体。超俗的の優雅な想像的世界に対する憧憬や思慕、審美的志向は、のちの幽玄体へ繋がってゆく。

幽玄の語が見られる古い例としてさらには『古今和歌集』真名序があげられる。「或いは事神異（ことみこと）に関り、或いは興（きょう）幽玄に入る」。詩

情が甚深微妙の境に達しているのを指したものだと解される。真名序の成立に関わったともいわれ、日本初の歌論である仮名序を書いた紀貫之の一首を留めておきたい。

桜花散りぬる風のなごりには水なき空に

波ぞ立ちける 紀貫之『古今和歌集』

桜の花を風が吹き散らした。そのなごりに、水のない空に波が立っている。幽玄に直結する幻想性がくきやかに感じられる。散る桜を媒介として、空の領する空間が静寂の水際へと変貌する。空の遥けさに、海の遥けさが呼ばれるようだ。そして、「空に波」とくると人麻呂の歌を思い出さずにはいられない。

天の海に雲の波たち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ 柿本人麻呂『万葉集』

空の海に雲の波が立って、月の船が星の林の陰に漕ぎ隠れてゆくのが見える。想像に広がる天上世界を「雲の波」「月の船」「星の林」とやや過剰なほどに比喩を駆使してファンタジーに遊ぶ。

万葉集から新古今和歌集へ。それは中国から学んだ詩の技法や発想を、貪欲に取り入れながら和歌が花開いた時代と言える。同時に貴族文化のなかで成熟し、閉塞化する和歌を伝統という財産として保持するため革新してゆく過程でもあった。歌論が書かれ創作論が次々に提唱されたことは、和歌と、和歌の内包する輝かしい貴族生活を継承する役割も大いにあっただろう。そうした要請のなかで見えてくるシュールレアリスム表現は現実的な思惑を多分に反映しているとも言える。